

横山光輝作『水滸伝』の構成と人物描写

張 岑

The Study of Structure and Characters in the Comics *Suikoden*

ZHANG Cen

Abstract

In the 17th century, *All Men Are Brothers* (水滸伝), was introduced to Japan alongside other popular works of Chinese fiction. *All Men Are Brothers* gained enormous popularity among its Japanese readership. The Japanese even created their own fiction based on the original. *All Men Are Brothers* is still popular in Japan today. It has been reinvented into various forms in order to match contemporary tastes, and this includes comics. This paper investigates the first Japanese comics based on *All Men Are Brothers*, known as *Suikoden* (水滸伝) in Japanese and written by Yokoyama Mitsuteru (横山光輝). The author will focus on the structure and characters of *All Men Are Brothers* in order to clarify the relationship between *Suikoden* (水滸伝) and the original text.

Keywords: 『水滸伝』、再創作、マンガ、横山光輝

はじめに

横山光輝作の『水滸伝』（以下は横山『水滸伝』と表記する）は原作『水滸伝』を下敷きとして作られた最初のマンガ作品であり、横山『水滸伝』には参考とすべき『水滸伝』マンガ作品が存在しなかった。横山『水滸伝』は従来の文学言語を自分の想像を加えてマンガ言語に訳した、画期的な『水滸伝』再創作と言えるだろう。中国古典文学の『水滸伝』（版本と書名が様々存在するため、本稿は一概に『水滸伝』と表記する）が、現代の日本にどのように受け入れられているのか、また現代日本人の好みに合わせてどのように変容しているのかという点は、日本における『水滸伝』受容の実態を考える上で明らかにされなくてはならない問題と言えるだろう。本稿は、この問題を明らかにするための試みとして、横山『水滸伝』を対象として基礎的な調査を行い、横山『水滸伝』における再創作の意義を見出すための手がかりを得ることを目標とする。

再創作の意義を見出すには、具体的、視覚的に何が描かれ何が描かれていないかという外面と、人物の内面の二つの側面から論じなくてはならないが、本稿では前者のみを扱う。現時点ではマンガ言語（線による人物と場面の造形やコマ配置など¹⁾）、あるいはマンガ表現論などを研究対象として扱うマンガ学は完全に成熟した分野とは言えないが、横山『水滸伝』のマンガ作品としての具体的な表現や技法に焦点を当て、外面描写に対する分析を行いたい。

一、日本における『水滸伝』再創作史

1 日本における『水滸伝』受容の概況

高島俊男は、江戸時代に日本に入ってきた白話小説は、通常、原書、和刻、翻訳、翻案という四つの段階を経て日本人に享受され、影響を与えたと指摘している²⁾。『水滸伝』の場合も同様であり、まず漢字だけの原書が日本にもたらされ、將軍や僧侶などによって所蔵された。その後唐話学習の流行などに伴い、徐々に日本人の間に広まるにつれ、輸入された本では需要を満たせなくなり、「返り点」、「送りがな」、また単語やフレーズの意味を表示する左訓を施した和刻本が作られ、日本人が読んで理解できる形で出版された。三番目の段階に当たる翻訳とは、漢字とカタカナが混じった漢文訓読風の訳文である。最後の段階として、『水滸伝』の場所や人物を日本に移し、『水滸伝』のストーリーを作品中に生かした翻案作品が生み出された。『水滸伝』は、これら四つの段階に当たる作品がすべて江戸時代に現れ、『忠義水滸伝』（和刻）、『通

1) 井上康「何がマンガ言語世界に於ける〈言葉〉であるか—線の運動〈場〉の弁証法」『京都精華大学大学紀要』第33号（2007年）、239-264頁。

2) 高島俊男『水滸伝と日本人—江戸から昭和まで』、大修館書店、1998年、43頁。

俗忠義水滸伝』（翻訳）、『湘中八雄伝』（翻案）が代表的作品として挙げられる。また『水滸画潜覧』をはじめとする一連の『水滸伝』絵本も江戸時代に作られた。絵本は、絵紙面の大部分を占め、余白の所に文章が綴られた本である。また、曲亭馬琴の『高尾船字文』のような、原作『水滸伝』から何らかの影響を受けた、読本という文字を主体とする新しいジャンルの作品も現れた。

明治時代以降になると、江戸時代と比べて形式の種類が少ないと言えるが、旧訳の再刊、注釈、文学研究、翻訳などを主な形として『水滸伝』は受容された。

20世紀以降のメディアミックス化時代に入ると、『水滸伝』再創作はさまざまなジャンルに渡って開花した。再創作とは、文学に限らず、文学以外のジャンルを含むという意味合いで扱われる文芸作品を指す。小説作品としては、吉川英治の遺作である『新・水滸伝』（講談社、1960-1963年）や北方謙三の書いた『水滸伝』（集英社、1999-2005年）などが挙げられ、『水滸伝』の舞台を現代に置き換えて展開するライトノベルなども出現する。そして映画・テレビドラマとして、1973年日本テレビで放送された『水滸伝』（中村敦夫主演）がある。また、『水滸伝』に基づいて作られたマンガ作品も数多くあり、原作の内容をファンタジーにアレンジしたSFマンガも見られる。

2 日本最初の『水滸伝』マンガと横山光輝

表1に示すとおり、横山『水滸伝』は日本最初の『水滸伝』マンガである。横山『水滸伝』以前は、中国歴史、または中国古典文学を題材としたマンガ作品は極僅かで、最初の作品は恐らく大藤信郎が『西遊記』に基づいて描いた『孫悟空物語』（1926年）である³⁾。『水滸伝』に関しては、横山『水滸伝』以前のマンガ作品はない⁴⁾。

横山光輝（1934-2004）は、日本の漫画家で、本名は横山光照。出身地は兵庫県神戸市須磨区である。1964年に神田三崎町に株式会社光プロダクションを設立し、横山光輝、馬場秀夫、井上英沖、宮越義勝、岸本修の5人は漫画製作以外にも企業広告のイラストや商品パッケージデザイン等に携わっていた。横山『水滸伝』もこの時期に作られた作品である。1997年に横山が病気のため、執筆活動を中断した時にグループは解散した。横山の代表作に『鉄人28号』（光文社、1956年-1964年）、『伊賀の影丸』（小学館、1961年-1966年）、『仮面の忍者』（小学館、1966年）、『魔法使いサリー』（集英社、1966年-1967年）、『コメットさん』（集英社、1967年）、『バビル二世』（秋田書店、1971年-1972年）、『三国志』（潮出版社、1972年-1978年）などが挙げられる。横山光輝は『水滸伝』『三国志』のヒットによって、『コミックトム』というマニア雑誌に発表の場を得た。そして、読者の要請を受け、中国歴史ものマンガを数多く創作した（表2）。

3) 李笑寒「日本動漫創作中的中国伝統文学題材研究」華中科技大学修士論文、2008年、6頁。URL：<http://www.cnki.net>

4) 米沢嘉博『横山マンガ大全：子どもの昭和史』、平凡社、1998年、110頁。

表1 日本における『水滸伝』マンガ作品（1960-2011）

作品名	作者	出版年	出版社
水滸伝	横山光輝	1967-1971	潮出版社
水滸伝	久保田千太郎	1996	講談社
魔獣水滸伝 KIZUNA	ビトウゴウ・夏野すいか	1996-1997	メディアワークス
マンガ水滸伝	さいとうたかを	2000	中央公論新社
水滸伝	さいとうたかを	2003	リイド社
水刃物語	三輪真雪	2004-2006	Mag-Garden
水滸伝	夏秋のずみ・李志清	2005	メディアファクトリー
絵巻水滸伝	森下翠・正子公也	2006-2007	魁星出版
ネリヤカナヤ水滸異聞	朱饜マサムネ	2008	メディアックス
AKABOSHI 異聞水滸伝	天野洋一	2009	集英社
月の蛇水滸伝異聞	中道裕大	2009-2012	小学館
幻想水滸伝 シリーズ	志水アキ等	2009	メディアファクトリー出版

（陳曦子2013年「日本における中国四大名著の受容及び再創作の概況」に基づき作成した）

表2 横山光輝の中国歴史もの漫画作品

作品名	掲載雑誌	掲載期間	出版元
水滸伝	希望ライフ	1967-1970	潮出版社
三国志	希望の友	1972-1978	潮出版社
戦国獅子伝	週刊漫画ストーリー	1972-1973	双葉社
狼の星座	週刊少年マガジン	1975-1977	講談社
若き獅子たち	コミックトム	1987-1992	潮出版社
史記	ビッグゴールド	1992-1997	小学館
殷周伝説	月刊コミックトムプラス	1994-2001	潮出版社

（株式会社光プロダクション監修の東京芸術劇場企画展図録「横山光輝～昭和から平成へマンガの鉄人が駆け抜けた軌跡」（2014年）に基づいて作成した）

横山光輝は中国歴史ものの創作のきっかけについて、以下のように述べている。

中学生時代に吉川英治氏の『三国志』を読んで感銘を受けたことがありましたが、さっそく読んだ『水滸伝』がこれに劣らずおもしろかったので、百〇八人の英雄・豪傑を個々に描くよりも歴史そのものを描いてみたくなりました。そこで、私から『水滸伝』そのものをストレートにやらせてほしいと編集部をお願いしてできたのが、あの『水滸伝』です。（中略）

私が中国ものに熱心に取り組んだもう一つの理由は、私たちが中国古典に熱中したことと比べ、中国古典が読まれなくなったことに対する抵抗を示したかったからです⁵⁾。

5) 横山光輝「中国史に魅せられて」『まんが劇画ゼミ』（集英社、1980年）、36頁。

上の発言によると、横山光輝は中国史に魅了され、編集部への要請を契機として『水滸伝』を描き始めた。また、中国古典を当時の日本人に紹介しようという気持ちが働いたのではないかと受け止めることができるだろう。ところが、横山『水滸伝』と原作とを詳細に比較してみると、原作に合わず、省略・改変されているところも多くあることが分かる。次章以降では、横山『水滸伝』と原作『水滸伝』の構成と表現技法の違いを見ていきたい。

二、横山『水滸伝』と原作『水滸伝』の構成の違い

横山『水滸伝』と原作『水滸伝』の構成を対照すると、横山『水滸伝』は原作『水滸伝』どおりに章を分けているのではなく、登場人物や舞台となった場所や地点が完全に一致するわけではないことがわかる。

この表3に示したように、横山『水滸伝』は原作『水滸伝』では分けられている複数の回をひとつの章にまとめて描いている場合が多く、原作『水滸伝』でひとつにまとめられている回を分割して描いた章はない。物語の展開の順序は踏襲されているが、原作『水滸伝』では章回小説として独立していた回が、横山『水滸伝』では組み直されているといえるだろう。

横山『水滸伝』序章と原作『水滸伝』の第一回を見てみよう。中国の北宋時代に、皇帝が龍虎山の法主張真人の祈祷で疫病を払ってもらうことに決め、使者として太尉の洪信を派遣した。洪太尉が迎えに来ると、張真人は自分で雲に乗り、都の東京に向かった。これで、洪太尉はつとめを果たしたわけであるが、その後で余計なことをしてしまう。すなわち、龍虎山には百八の魔王を封じ込めていると伝えられる伏魔の殿という祠があったが、洪太尉は好奇心に駆られ、伏魔の殿を開けてしまうのである。この行為によって、魔王たちは封印が解かれ、世に出て数々の災いを引き起こすのである。横山『水滸伝』では24ページ、原作では約5400字が費やされたこの場面は、横山『水滸伝』の序章は原作の第一回と粗筋がほぼ一致しており、原作通りに描かれていると言える。序章を基準に各章を見ると、横山『水滸伝』では梁山泊集結以降の段はその前の個人列伝の段と比較して詳細に描かれていると言えるだろう。表3を詳しく見ると、史進、魯智深、林沖、晁蓋、宋江などの列伝は、一章の分量が少なくとも原作の三回分と対応している。一方、祝家莊攻略、高唐州攻略、青州攻略の段は一章の分量が原作の一回分または二回分と対応している。言い換えれば、横山『水滸伝』では、英雄豪傑が集結して以降の物語は個人列伝より膨らまされていると見なせるだろう。

表3 構成対照表

横山『水滸伝』	原作（依拠テキストを明示）
序章	第一回 張天師祈禳瘟疫 洪太尉誤走妖魔
第一章	第二回 王教頭私走延安府 九紋竜大鬧史家村 第三回 史大郎夜走華陰県 魯提轄拳打鎮関西
第二章 魯提轄	第三回 史大郎夜走華陰県 魯提轄拳打鎮関西 第四回 趙員外重修文殊院 魯智深大鬧五台山 第五回 小霸王醉入銷金帳 花和尚大鬧桃花村 第六回 九紋竜剪経赤松林 魯智深火燒瓦罐寺
第三章 豹子頭林冲	第六回 九紋竜剪経赤松林 魯智深火燒瓦罐寺 第七回 花和尚倒拔垂楊柳 豹子頭誤入白虎堂 第八回 林教頭刺配滄州道 魯智深大鬧野猪林 第九回 柴進門招天下客 林冲棒打洪教頭
第四章 高家の魔手	第九回 柴進門招天下客 林冲棒打洪教頭
第五章 林冲脱獄 ⁶⁾	第十回 林教頭風雪山神廟 陸虞候火燒草料場 第十一回 朱貴水亭施弓箭 林冲雪夜上梁山
第六章 青面獸楊志	第十一回 朱貴水亭施弓箭 林冲雪夜上梁山 第十二回 梁山泊林冲落草 汴京城楊志売刀
第七章 晁蓋と六人の部下	第十三回 急先鋒東郭争功 青面獸北京闖武 第十四回 赤髮鬼醉臥靈官殿 晁保正認義東溪村 第十五回 呉学究説三阮撞筹 公孫勝応七星聚義 第十四回 楊志押送金銀担 呉用智取生辰綱
第八章 新頭領晁蓋	第十七回 花和尚单打二龍山 青面獸双奪宝珠寺 第十八回 美髯公智穩挿翅虎 宋公明私放晁天王 第十九回 林冲水寨大併火 晁蓋梁山小奪泊 第二十回 梁山泊義士尊晁蓋 鄆城県月夜走劉唐
第九章 宋江清州に走る	第二十回 梁山泊義士尊晁蓋 鄆城県月夜走劉唐 第二十一回 虔婆醉打唐牛児 宋江怒殺閻婆惜 第二十二回 閻婆大鬧郛城県 朱仝義釈宋公明 第三十二回 武行者醉打孔亮 錦毛虎義釈宋江 第三十三回 宋江夜看小鰲山 花榮大鬧清風寨
第十章 清風山の戦い	第三十三回 宋江夜看小鰲山 花榮大鬧清風寨 第三十四回 鎮三山大鬧青州道 霹靂火夜走瓦礫場
第十一章 黄信の悲劇	第三十三回 宋江夜看小鰲山 花榮大鬧清風寨 第三十四回 鎮三山大鬧青州道 霹靂火夜走瓦礫場
第十二章 囚人旅	第三十五回 石將軍村店寄書 小李広梁山射雁 第三十六回 梁山泊呉用拳戴宗 揭陽嶺宋江逢李俊 第三十七回 没遮拦追趕及時雨 船火児大鬧浚陽江
第十三章 宋江受難	第三十七回 没遮拦追趕及時雨 船火児大鬧浚陽江 第三十八回 及時雨会神行太保 黒旋風闖浪里白跳 第三十九回 浚陽樓宋江吟反詩 梁山泊戴宗传假信
第十四章 梁山泊の救援	第三十九回 浚陽樓宋江吟反詩 梁山泊戴宗传假信 第四十回 梁山泊好漢劫法場 白龍廟英雄小聚義 第四十一回 宋江智取無為軍 張順活捉黄文炳
第十五章 三卷の天書	第四十一回 宋江智取無為軍 張順活捉黄文炳 第四十二回 還道村受三卷天書 宋公明遇九天玄女
第十六章 おたずね者黒旋風	第四十二回 還道村受三卷天書 宋公明遇九天玄女 第四十三回 假李逵剪径劫单人 黒旋風沂嶺殺四虎
第十七章 はかられた李逵	第四十三回 假李逵剪径劫单人 黒旋風沂嶺殺四虎 第四十四回 錦豹子小径逢戴宗 病関索長街遇石秀

第十八章 祝家荘の野望	第四十六回 病関索大鬧翠屏山 拼命三郎火烧祝家荘 第四十七回 撲天双修生死書 宋公明一打祝家荘 第四十八回 一丈青单捉王矮虎 宋公明兩打祝家荘
第十九章 苦境の梁山泊軍	第四十八回 一丈青单捉王矮虎 宋公明兩打祝家荘
第二十章 登州府からの仲間	第四十九回 解珍解宝双越獄 孫立孫新劫大牢
第二十一章 祝家荘落ちる	第五十回 呉学究双掌連環計 宋公明三打祝家荘
第二十二章 柴進受難	第五十一回 挿翅虎枷打白秀英 美髯公誤失小衙内 第五十二回 李逵打死殷天錫 柴進失陷高唐州
第二十三章 梁山泊出陣	第五十二回 李逵打死殷天錫 柴進失陷高唐州 第五十三回 戴宗智取公孫勝 李逵斧劈羅真人
第二十四章 一清道人	第五十三回 戴宗智取公孫勝 李逵斧劈羅真人 第五十四回 入雲龍鬪法破高廉 黒旋風探穴救柴進
第二十五章 高廉の最期	第五十四回 入雲龍鬪法破高廉 黒旋風下井救柴進
第二十六章 官軍梁山泊に向かう	第五十四回 入雲龍鬪法破高廉 黒旋風下井救柴進 第五十五回 高太尉大興三路兵 呼延灼摆布連環馬
第二十七章 官軍敗走	第五十七回 徐寧教使鉤鎌槍 宋江大破連環馬
第二十八章 呼延灼青州に向かう	第五十七回 徐寧教使鉤鎌槍 宋江大破連環馬 第五十八回 三山聚義打青州 衆虎同心帰水泊
第二十九章 三山連合軍	第五十八回 三山聚義打青州 衆虎同心帰水泊
第三十章 奇略	第五十八回 三山聚義打青州 衆虎同心帰水泊 第五十九回 呉用賺金鈴吊挂 宋江鬧西岳華山
第三十一章 おとずれた不幸	第六十回 公孫勝芒碭山降魔 晁天王曾頭市中箭
第三十二章 河北の玉麒麟	第六十回 公孫勝芒碭山降魔 晁天王曾頭市中箭 第六十一回 呉用智賺玉麒麟 張順夜鬧金沙渡
第三十三章 待っていた災い	第六十二回 放冷箭燕青救主 劫法場石秀跳楼
第三十四章 北京攻略	第六十二回 放冷箭燕青救主 劫法場石秀跳楼 第六十三回 宋江兵打北京城 関勝議取梁山泊 第六十六回 時遷火烧翠雲楼 呉用智取大名府
第三十五章 曾家の最期 ⁷⁾	第六十八回 宋公明夜打曾頭市 盧俊義活捉史文恭

三、描写の有無と表現技法における違い

次に、原作『水滸伝』と横山『水滸伝』における登場人物の有無と人物描写の表現技法の違いについて見ていきたい。原作『水滸伝』と横山『水滸伝』との登場人物を以下の対照表に示す⁸⁾。

6) 第五章は分量が非常に少なく、また粗筋が第四章と密接に繋がるので、第四章と合併して扱う。

7) 後の第三十六章と第三十七章は、原作の内容が多いに省略され、原作と照合して見るのは難しい。ここで省略させていただく。

8) 二重下線を施した項目は原作『水滸伝』にのみ現れる人物と場面、または横山『水滸伝』にのみ現れる人物と場面である。下線を施した項目は、両作品に名称が異なる人物と場面である。

表4 登場人物対照表⁹⁾

	横山『水滸伝』の登場人物	原作『水滸伝』の登場人物
0	洪太尉、張天師	洪太尉、張天師
1	王進、高俅、史進、朱武、楊春、陳達、李吉	王進、高俅、史進、朱武、楊春、陳達、李吉
2	史進、魯達、李忠、金翠蓮親子、鄭関西、丘小一、崔道成	史進、魯達、李忠、金翠蓮親子、鄭関西、 <u>趙員外</u> 、 <u>智真長老</u> 、 <u>劉太公</u> 、 <u>周通</u> 、丘小一、崔道成
3	魯達、金翠蓮親子、趙員外、林冲、高衙曹司、開封の代官、護送役人、高太尉の配下	智清長老、林冲、高衙内、 <u>陸謙</u> 、 <u>富安</u> 、高太尉、 <u>董超</u> 、 <u>薛霸</u>
4		
5 ¹⁰⁾	林冲、魯智深、柴進、洪先生、牢城の奉行、牢番長、高太尉の配下	林冲、柴進、洪教頭、管營、差拔、 <u>陸謙</u> 、 <u>富安</u>
6	案内役、林冲、王倫、楊志、高太尉、牛二	<u>朱貴</u> 、林冲、王倫、楊志、高太尉、牛二
7	晁蓋、劉唐、呉学人、阮兄弟、一清道人	晁蓋、劉唐、 <u>雷横</u> 、 <u>呉用</u> 、阮兄弟、 <u>公孫勝</u> 、 <u>楊志</u>
8	宋江、晁蓋、呉学人、劉唐、阮兄弟、一清道人、代官、密告者、林冲、王倫	宋江、晁蓋、 <u>何濤</u> 、 <u>何清</u> 、 <u>呉用</u> 、 <u>公孫勝</u> 、劉唐、阮兄弟、林冲、王倫
9	阮兄弟、宋江、密告者、燕順、花榮、劉高の女房、劉高	劉唐、宋江、 <u>王婆</u> 、 <u>閻婆</u> 、 <u>張文遠</u> 、唐牛児、郟城県知事、 <u>朱仝</u> 、 <u>雷横</u> 、 <u>宋太公</u> 、 <u>宋清</u> 、 <u>柴進</u> 、 <u>武松</u> 、 <u>孔明</u> 、 <u>孔亮</u> 、 <u>燕順</u> 、 <u>王英</u> 、 <u>鄭天寿</u> 、 <u>劉高の女房</u> 、 <u>劉高</u> 、 <u>花榮</u>
10	花榮、宋江、劉高、黄信、燕順	花榮、宋江、 <u>劉高</u> 、 <u>劉高の女房</u> 、黄信、燕順、 <u>王英</u> 、 <u>鄭天寿</u> 、 <u>秦明</u>
11	花榮、宋江、劉高、黄信、燕順	花榮、宋江、 <u>劉高</u> 、 <u>劉高の女房</u> 、黄信、燕順、 <u>王英</u> 、 <u>鄭天寿</u> 、 <u>秦明</u>
12	宋江、花榮、黄信、燕順、石勇、林冲、阮兄弟、宋清、宋太公、代官、護送役人、晁蓋、呉学人、李俊、張横、穆弘	宋江、花榮、黄信、 <u>秦明</u> 、 <u>燕順</u> 、 <u>王英</u> 、 <u>鄭天寿</u> 、 <u>石勇</u> 、 <u>呂方</u> 、 <u>郭盛</u> 、 <u>晁蓋</u> 、 <u>呉用</u> 、 <u>宋清</u> 、 <u>宋太公</u> 、 <u>代官</u> 、 <u>護送役人</u> 、 <u>李俊</u> 、 <u>李立</u> 、 <u>童威</u> 、 <u>童猛</u> 、 <u>薛永</u> 、 <u>張横</u> 、 <u>穆太公</u> 、 <u>穆春</u> 、 <u>穆弘</u>
13	宋江、戴宗、李逵、張順、黄文炳、蔡九知事	宋江、戴宗、李逵、張順、黄文炳、蔡九知事、 <u>小張乙</u> (賭博屋の主人)、 <u>宋玉蓮親子</u>
14	宋江、戴宗、李逵、晁蓋、呉用、張順、黄文炳、蔡九知事	宋江、黄文炳、蔡九知事、戴宗、李逵、朱貴、晁蓋、 <u>呉用</u> 、 <u>金大堅</u> 、 <u>蕭讓</u> 、 <u>王英</u> 、 <u>宋万</u> 、 <u>杜遷</u> 、 <u>鄭天寿</u> 、張順、 <u>侯健</u>
15	晁蓋、宋江、宋清、逮捕役人、九天玄女、梁山泊の援軍	晁蓋、宋江、 <u>李逵</u> 、宋清、 <u>趙能</u> 、 <u>趙得</u> 、九天玄女、梁山泊の援軍
16	一清道人、宋江親子、李逵、晁蓋、朱貴、朱富、おいはぎ、おいはぎの女房、李逵の母、獵師たち	<u>公孫勝</u> 、宋江、李逵、晁蓋、朱貴、朱富、 <u>李鬼</u> 、 <u>李鬼の女房</u> 、李逵、李逵の母、獵師たち
17	庄屋、金蓮、李逵、李雲、朱貴、朱富	李逵、 <u>曹太公</u> 、 <u>李鬼の女房</u> 、李雲、朱貴、朱富
18	李雲、朱富、宋江、黄信、花榮、李逵、祝朝奉、祝龍	楊雄、石秀、石遷、 <u>杜興</u> 、 <u>李応</u> 、 <u>祝彪</u> 、宋江、晁蓋、梁山泊軍 (黄信、花榮、李逵など)
19	宋江、一丈青、林冲、李逵、祝朝奉、祝龍、栾廷玉	宋江、 <u>李応</u> 、 <u>杜興</u> 、李逵、 <u>扈三娘</u> 、梁山泊軍 (林冲、李逵、 <u>欧鵬</u> 、 <u>秦明</u> 、 <u>穆弘</u> 、 <u>花榮</u> 、 <u>馬麟</u> など) 祝龍、祝彪、栾廷玉
20	解珍、解宝、毛旦那、楽和、孫立、孫新、顧大嫂、出雲龍、独角龍、 <u>呉学人</u>	解珍、解宝、毛太公、 <u>毛仲義</u> 、 <u>楽和</u> 、孫立、 <u>王孔目</u> 、 <u>包吉</u> 、孫新、顧大嫂、孫立、 <u>鄒淵</u> 、 <u>鄒潤</u>
21	孫提轄、祝朝奉、祝龍、祝虎、出雲龍、独角龍、孫新、解珍、解宝、栾廷玉、宋江、 <u>呉学人</u> 、林冲	<u>扈成</u> 、孫立、祝朝奉、祝龍、祝虎、顧大嫂、孫新、解珍、 <u>解宝</u> 、 <u>楽和</u> 、祝虎、 <u>穆弘</u> 、 <u>石秀</u> 、宋江、 <u>呉用</u> 、林冲
22	一丈青、宋江、林冲、李逵、柴進、殷天錫、柴皇城、高廉	<u>王矮虎</u> 、 <u>扈三娘</u> 、宋江、柴進、李逵、 <u>呉用</u> 、 <u>朱仝</u> 、 <u>雷横</u> 、 <u>白秀英</u> 、郟城県知事、滄州知事、滄州知事の息子、 <u>柴皇城</u> 、 <u>殷天錫</u> 、高廉

23	晁蓋、宋江、林冲、呉学人、李逵、高廉、于直、戴宗	晁蓋、宋江、林冲、呉学人、李逵、高廉、于直、戴宗、 <u>温文宝</u> 、 <u>秦明</u>
24	戴宗、李逵、一清道人 <small>の母</small> 、一清道人、羅真人、高廉、宋江	戴宗、李逵、公孫勝 <small>の母</small> 、公孫勝、羅真人、 <u>薊州府の役人</u> たち、 <u>湯隆</u> 、高廉、宋江
25	一清道人、高廉、宋江、梁山泊軍、高唐州守備軍、柴進	一清道人、高廉、宋江、梁山泊軍、高唐州守備軍、柴進、 <u>李逵</u> 、 <u>牢番蘭仁</u>
26	高俅、道君皇帝、呼延灼、韓滔、彭汜、晁蓋、 <u>轟天雷</u> 、梁山泊水軍頭領（阮兄弟、張順など）	高俅、道君皇帝、呼延灼、韓滔、彭汜、晁蓋、 <u>宋江</u> 、 <u>凌震</u> 、梁山泊水軍頭領（阮兄弟、張順など）
27	呼延灼、韓滔、晁蓋、宋江、 <u>轟天雷</u>	呼延灼、韓滔、晁蓋、宋江、 <u>徐寧</u> 、 <u>凌震</u>
28	呼延灼、慕容知事、周通、李忠、魯智深、楊志	呼延灼、慕容知事、周通、李忠、魯智深、楊志、 <u>武松</u> 、 <u>孔明</u> 、 <u>孔亮</u>
29	呼延灼、周通、李忠、魯智深、楊志、孔亮、宋江、晁蓋、呉学人	呼延灼、周通、李忠、魯智深、楊志、 <u>武松</u> 、孔亮、宋江、晁蓋、呉用
30	呼延灼、魯智深、楊志、周通、李忠、宋江、林冲、孔亮、宋江、晁蓋、呉学人、慕容知事、孔亮、史進、朱武、楊春	呼延灼、魯智深、楊志、 <u>武松</u> 、 <u>施恩</u> 、 <u>張青</u> 、 <u>孫二娘</u> 、周通、李忠、宋江、林冲、 <u>呉学人</u> 、 <u>孔亮</u> 、 <u>宋江</u> 、 <u>秦明</u> 、 <u>花榮</u> 、晁蓋、呉用、慕容知事、孔亮、史進、朱武、 <u>楊春</u> 、 <u>賈太守</u> 、 <u>宿太尉</u>
31	段景住、晁蓋、宋江、呉学人、李逵、戴宗、曾塗、曾密、曾索、曾魁、曾昇、史文恭、二人の僧侶	段景住、晁蓋、宋江、呉学人、李逵、戴宗、曾塗、曾密、曾索、曾魁、曾昇、史文恭、二人の僧侶
32	宋江、呉学人、ある僧侶、李逵、盧俊義、李固、燕青、林冲、魯智深、花榮	宋江、呉用、 <u>大圓法師</u> 、李逵、盧俊義、李固、燕青、林冲、魯智深、 <u>花榮</u>
33	盧俊義、燕青、李固、盧俊義の女房、蔡福	盧俊義、燕青、李固、盧俊義の女房、蔡福
34	蔡福、蔡慶、梁中書、呉用、宋江、柴進、索超、李成、梁山泊軍（李逵、魯智深、轟天雷など）、李固、盧俊義の女房、燕青、盧俊義	蔡福、蔡慶、梁中書、張孔目、呉用、宋江、柴進、董超、薛霸、石秀、楊雄、索超、李成、聞達、蔡京、宣贊、郝思文、 <u>閔勝</u> 、梁山泊軍（李逵、 <u>秦明</u> 、魯智深、張橫、 <u>張順</u> 、阮兄弟など）、李固、盧俊義の女房、燕青、 <u>盧俊義</u>
35	曾塗、曾密、曾索、曾魁、曾昇、史文恭、宋江、盧俊義、梁山泊軍（李逵、轟天雷など）	曾塗、曾密、曾索、曾魁、曾昇、史文恭、宋江、盧俊義、梁山泊軍（李逵、轟天雷など）

上の表に明らかなように、まず第一に横山『水滸伝』と原作『水滸伝』は、登場人物においても違いがある。

原作『水滸伝』ではどのような登場人物に対しても名前が与えられているのに対し、表4に示したように、横山『水滸伝』では端役に関しては名前が出されなかったり、役を置き換えられたり、何人かの人物が一人に合併されたり、あるいは粗筋をアレンジすることによって元の人物が完全に削除されたりする場合が多くあることが分かる。ここで特に取り上げたいのは、横山『水滸伝』第三章で登場する「護送役人」である。表4が示すとおり、横山『水滸伝』で名無しの端役として扱われる「護送役人」は、原作『水滸伝』では以下の引用にあるように、「董超」「薛霸」という名前を与えられて登場する。

就此日府尹回來升廳、叫林冲除了長枷、斷了二十脊杖、喚個文筆匠刺了面頰、量地方遠近、

9) 表の左段の数字は、横山『水滸伝』の第何章であるかを示す。「0」は序章を表す。

10) 注6参照。

該配滄州牢城。當廳打一面七斤半團頭鐵葉護身枷釘了、貼上封皮、押了一道碟文、差兩個防送公人監押前去。

兩個人是董超、薛霸。二人領了公文、押送林沖出開封府來、只見眾鄰舍並林沖的丈人張教頭都在府前接著¹¹⁾。

訳文：その日、府尹は役所へ帰ると、林沖をひき出して大枷をはずし、棒打ち二十の刑に処し、ついで刺青師を呼んで顔に刺青を入れさせたのち、土地の遠近を考へて滄州の牢城（苦役場）へ送るのは適当ときめた。かくてその場で重さ七斤半の鉄板にまるい穴をあけた首枷をはめて封印を貼り、送り状一通をつくって、ふたりの護送役人に林沖を推送して行かせることにした。そのふたりは董超、薛霸といった。

ふたりは送り状の公文書を受けると、林沖をひきたてて開封府を出た。と、その門前に隣り近所の人々や舅の張教頭が迎えにきていて、（以下省略¹²⁾）

この二人は護送途中で密かに囚人の林沖を殺すようにと高太尉から命ぜられ、結局魯智深に邪魔されて暗殺を遂げることが出来なかった。ここまでの内容は横山『水滸伝』と原作とは一致する。しかし、原作『水滸伝』第六十二回で「董超」「薛霸」は再び登場し、今度は蘆俊義を暗殺しようと命じられ、同じく未遂に終わる。

隨喚蔡福牢中取出蘆俊義來、就當廳除了長枷、讀了招狀文案、決了四十脊杖、換一具二十斤鐵葉盤頭枷、就廳前釘了；便差董超、薛霸管押前去、直配沙門島。原來這董超、薛霸自從開封府做公人、押解林沖去滄州路上害不得林沖、回來被高太尉尋事、刺配北京。梁中書見他兩個能幹、就留在留守司勾當。今日又差他兩個監押蘆俊義¹³⁾。

訳文：さっそく蔡福にいいつけて蘆俊義を牢獄から出させ、庁前で長枷をはずし、判決文を読み上げたうえ、棒打ち四十の刑に処し、重さ二十斤の鉄板の首枷に換えてその場ではめこみ、董超と薛霸に護送させて沙門島へ流すことにした。そもそもこの董超と薛霸は、開封府の役人をしていたとき、林沖を護送して滄州へ行く途中で、林沖を殺すことができずに帰ってきたために、高太尉にとがめられて北京に流されていたのだったが、梁中書は彼らふたりがなかなかはたらきのあるのに目をとめ、留守司にひきとめて仕事をさせていたというわけで、このたびまたふたりが蘆俊義の護送を命ぜられたのである¹⁴⁾。

金聖嘆によると、梁山泊に最初と最後に入山する者は、ちょうど林沖と蘆俊義にあたり、二

11) 施耐庵『水滸伝』、岳麓書院、2012年、62頁。

12) 駒田信二『水滸伝（上）』、平凡社、1972年、102頁。

13) 施耐庵『水滸伝』、岳麓書院、2012年、496頁。

14) 駒田信二『水滸伝（中）』、平凡社、1972年、319頁。

人は同じように誣告され、そして同じ董超、薛覇によって牢獄に護送されることが平板な文章を面白くしている、という¹⁵⁾。つまり、伏線を敷いて前後呼応して端役を適切に配置することによる配置の妙によって、面白みが出てくる、というのである。また、原作『水滸伝』は長大な小説作品として、登場人物が数多くいるにもかかわらず、主人公の梁山泊の英雄豪傑以外に、世間を渡る個々の端役のことも綿密に描かれ、人情や世情を幅広く反映している。役人である董超、薛覇が繰り返し暗殺任務を引き受けることと賄賂を受ける時のやり取りに関する描写からは、当時の社会風紀と人情の様子を垣間みることができるだろう。

董超、薛覇以外にも、魯智深の段で登場する端役の智真長老、桃花山山賊の周通、鄆城県都頭の雷横等々、原作では前後呼応して登場する端役の人物が挙げられる。

一方、横山『水滸伝』では上記の端役の存在を薄めて表現する傾向がある。前述したように、表4を見ると、横山『水滸伝』では端役の合併、削除されることが多いと確認できる。横山『水滸伝』では、端役の役割が軽減されることにより、梁山泊の英雄豪傑がより際立ち、原作に豊富な端役によって描かれる世界は減少していると言えるだろう。

次に、横山『水滸伝』の人物像の練り上げ方を見ていく。人物像の練り上げ方については表情に調査を行い、人物像がどのように表現されているかを見たい（図1、図2）。

図が表しているように、横山『水滸伝』の洪太尉の表情は変化に富んでいる。一方、原作『水滸伝』には、洪太尉への外見描写は少なく、心理描写とセリフで洪太尉の人物像を練り上げていると言える。

這洪太尉獨自一個、行了一回、盤坡轉徑、攬葛挽藤。約莫走過了數個山頭、三二裏多路、看看腳酸腿軟、正走不動、口裏不說、肚裏躊躇、心中想道：“我是朝廷貴官公子、在京師時重裊而臥、列鼎而食、尚兀自倦怠；何曾穿草鞋、走這般山路！知他天師在那裏、卻教下官受這般苦。”¹⁶⁾

訳文：洪太尉はただひとりけわしい径をすすみ行き、つたをよじかずらにすがりながらいくつかの尾根を越えて、二三里（およそ六里が日本の一里にあたる）あまりも行くうちに、もう脚がくたくたになって動けなくなり、口には出さなかったが、腹の中では二の足を踏んで、思うよう、

「わしは朝廷の高官だ。京師におればしとねをかさねて寝、器を並べてくらい、しかもなお心たれりとはせぬ身なのに、草鞋ばきで、こんな山路を歩かされようとは。天師のいどころがわからぬばかりに、こんなうきめにあわねばならぬわ¹⁷⁾。」

15) 金聖嘆（1608-1661）『貫華堂第五才子書水滸伝』、江蘇古籍出版社、1985年、385頁。

16) 施耐庵『水滸伝』、岳麓書院、2012年、3頁。

17) 駒田信二『水滸伝（上）』、平凡社、1972年、8頁。

那大蟲望著洪太尉、左盤右旋、咆哮了一回、托地望後下坡下了路去、洪太尉倒在樹根底下、唬的三十六個牙齒捉對兒廝打、那心頭一似十五個吊桶、七上八落的響、渾身卻如重風麻木、兩腿一似鬥敗公雞、口裏連聲叫苦。大蟲去了一盞茶時、方才爬將起來¹⁸⁾。

訳文：虎は洪太尉を見やりながら行きつもどりつして、しばらく咆えたてていたが、やがてぱっと身を躍らせてうしろの山路へ駆けおりて行った。洪太尉は木の根もとにうち倒れたままおそろしさのあまり上下三十六本の歯をがちがちとかみあわせ、胸の早鐘はまるで十五六個の釣瓶桶の上下するような乱調子。全身は中風病みのようになえしびれ、両脚は蹴合いに敗けた雄鶏のよう。口はただ悲鳴をあげるばかり。

虎が去ってしばらくしてから、ようやくはい起きた太尉は、放り出した香炉をひろいあげてまた御香を焚き、天師に会うべくふたたび山を登りはじめた¹⁹⁾。

上に挙げた一つ目の例は洪太尉が山登りの辛さに耐えられない場面、二つ目の例は突然山道に現れた虎に肝をつぶす場面である。ほかに、高官の洪太尉が竜虎山の道衆の前に威光を立てる描写や、龍虎山道観現物を楽しみ、好奇心に駆られて無理やりに伏魔の殿を開けさせる描写もある。原作の描写は、すべての読者が洪太尉に対して同じ考えや印象を抱くとは限らないが、ここでの洪太尉はわがままで人間らしい一面を見せたと言えるだろう。これに対し、横山『水滸伝』はマンガ作品で、洪太尉のわがままで人間臭い一面をはっきり捉え、以上の描写を非常に豊富な表情に転換し、洪太尉の人物像を練り上げた。

しかし、横山『水滸伝』では、すべての人物は豊富な表情を有するわけではない。以下の例を見てみよう(図3)。

ここに登場する王進は表情の変化が洪太尉と比べて乏しい。洪太尉のように、笑ったり驚いたり、焦ったりする表情がなく、常に目を閉じて冷静で沈着な表情を浮かべており、人間臭い洪太尉に反して毅然とした武芸者の意気が多少窺われるだろう。原作には王進は武芸の達人と設定されるが、王進が無表情、そして目を閉じた描写は原作には見当たらず、横山光輝は原作のことばと行動から、王進の冷静で沈着な個性を捉え、無表情で毅然たる表情で王進の人物像を練り上げたのではないかと考えられるだろう。

上に挙げた洪太尉と王進の表情は、原作に記載されていないが、原作の内容と深く関わり、イメージがかけ離れたわけではないと受け止めることができる。このように人物の表情に原作のイメージを継承していることを見いだすことができる反面、原作のイメージと合わない場合がある(図4)。

原作の宋江は小官吏出身で慈悲深く、気風がいい人に設定されるが、頼りなく軟弱で無気力の一面もある。山賊に脅かされたり、敵に追い駆けられたりする場面、第三十九回には謀反の

18) 施耐庵『水滸伝』、岳麓書院、2012年、3頁。

19) 駒田信二『水滸伝(上)』、平凡社、1972年、9頁。

詩で役人に狙われ、捕縛から逃れるために糞小便の中を転がって狂人のふりをした挙げ句、拷問に耐えられず自白する段も描かれている。

一方、横山『水滸伝』では宋江を武芸の達者に設定し、王進と同じように無表情で目を閉じた姿で練り上げた。こうして、毅然たる武芸者の意気が見えるようになり、原作に現れる軟弱で無気力な性格は失われることとなった。

つまり、横山『水滸伝』には原作の人物の性格をさらにほりさげ、表情を描いたと考えられる人物と、原作の人物の性格が変えられ、新たな性格が表情を通じて表現されている人物を見いだすことができる。これは、視覚的な表情を与えるという、文学描写ではなくマンガというだからこそ可能な表現手段が活かされた結果であると言えるだろう。

おわりに

本稿では、横山光輝のマンガ『水滸伝』の再創作性を明らかにし、再創作の意義を見いだすための基礎作業として、構成と人物描写において原作『水滸伝』との比較を行なった。その結果、横山『水滸伝』は、現代日本において最初の『水滸伝』マンガとして、原作と深く関連する部分があれば、作者横山光輝によりアレンジされた部分もあることを確認することができた。

第一章では日本における『水滸伝』マンガ作品の出版状況を整理し、横山光輝は『水滸伝』マンガの第一人者であり、『水滸伝』の再創作を論ずるために欠かせないことを確認した。第二章では、構成対照表を通じて横山『水滸伝』構成上の特徴を分析した。横山『水滸伝』の各章が原作『水滸伝』にどのように対応しているのかを明らかにし、原作『水滸伝』より詳細に描かれている場合と、より簡略に描かれている場合がある可能性があることを指摘した。横山『水滸伝』は、梁山泊集結までの個人列伝より、それ以降の集団行為がより詳細に描かれていることが分かった。これは横山『水滸伝』構成上の特徴であると見なせるだろう。第三章では、原作と照合しながら、人物描写に関して考察を行った。人物の有無においては、端役が合併、削除されており、梁山泊の英雄豪傑がより際立つように仕上げられていることが分かった。ところが、これによって原作では豊富な端役によって描かれる世界が減少しており、当時の人情や世情、また端役を適切に配置してはじめて味わえる原作の面白みが見えなくなったと言えるだろう。人物像の練り上げ方においては、横山『水滸伝』では人物の性格をほりさげ、それに即して表情を描くこともあれば、原作の人物の性格を変え、表情を通じて表現するということがあり、この点に再創作性や再創作の意義の手がかりがあると考えられるだろう。

日本における『水滸伝』再創作は歴史が長く、作品の数も多い。受容の形式も、内面の理解も、時代によって変化している。『水滸伝』再創作作品間の関連性の検討や、また日中両国の『水滸伝』再創作の比較分析など、残された課題は多いと言える。

